

# 話し合いを深める支援のあり方

## —高学年「なにをつくろうかな？」の実践から—

藤村佳令

### 1 話し合い活動と心情の深まりについて

児童の学校生活における「友だちとのかかわり」を多面的にとらえてみると、そこには多くの葛藤場面を見いだすことができる。2人以上の集団があり、それぞれの児童に思いや考えがあり、それらが一つの方向に向かっていこうとすると、大なり小なり葛藤場面が生まれている。児童の思いや考えが強いほど、葛藤は大きくなっている。

葛藤場面を経験する時、児童の内部では何かが変化していると考えられる。より多くの葛藤場面を経験し、解決しようと努力することを通して、心情が深まり豊かになっていく様子を見ることが出来る。具体的には、次のような豊かさが養えると考えられる。

- ・友だちの意見を、受け入れることができるようになる。
- ・自分の意見と友だちの意見を比較することができるようになる。
- ・自己主張するだけでは、解決に結びつかないことがわかり、何とか調整を図ろうと努力することができるようになる。

児童が、将来社会生活を営んでいく上で、自己主張するだけでは、円滑な人間関係を築いていくのは困難であると予想される。いかに他者の意見を受け入れ、自分の意見と比較し、解決に向けて調整を図っていくかが重要になってくる。この基盤となる力を培うためにも、葛藤をより多く経験し、自己に納得できる形で解決していく力を養っていくことが必要であると考えられる。さしずめ学校生活においては、話し合い活動を通して葛藤場面を経験することができ、より豊かに心情を深めていくことができるものと期待する。

### 2 昨年度の取り組み

昨年度は「葛藤場面における支援のあり方」として、本年度と同様に、話し合いを深めていくための支援のあり方について探っていった。具体的な学習の場として、お楽しみ会や誕生会での調理内容についての話し合いを設定した。

#### (1) 具体的な支援の方法

- ① 児童が希望する調理内容を具体物で提示する
- ② 話し合いのための活動時間を設定する

#### (2) 成果

##### ① 具体物を提示する支援

友だちの意見（希望した食べ物のよさ）を具体物によって、目にしたり、触れたり、臭いをかいだり、食べたりと感覚を通して理解することができた。その結果、友だちの意見を自分の意見と比較したり、自分の意見を考え直してみたりすることができた。

##### ② 活動時間を設定する支援

時間内に決定しなければならないという気持ちから、自分の意見と友だちの意見とに何とか折り合いをつけ、1つにまとめていこうとする児童の姿を見ることができた。

#### (3) 課題

##### ① 具体物を提示する支援

児童が希望する具体物を準備できていなければ、個々の葛藤を深めることは難しくなってくる。普段から、その時々児童の好みや実態を正確に把握する目を、養っておくこと

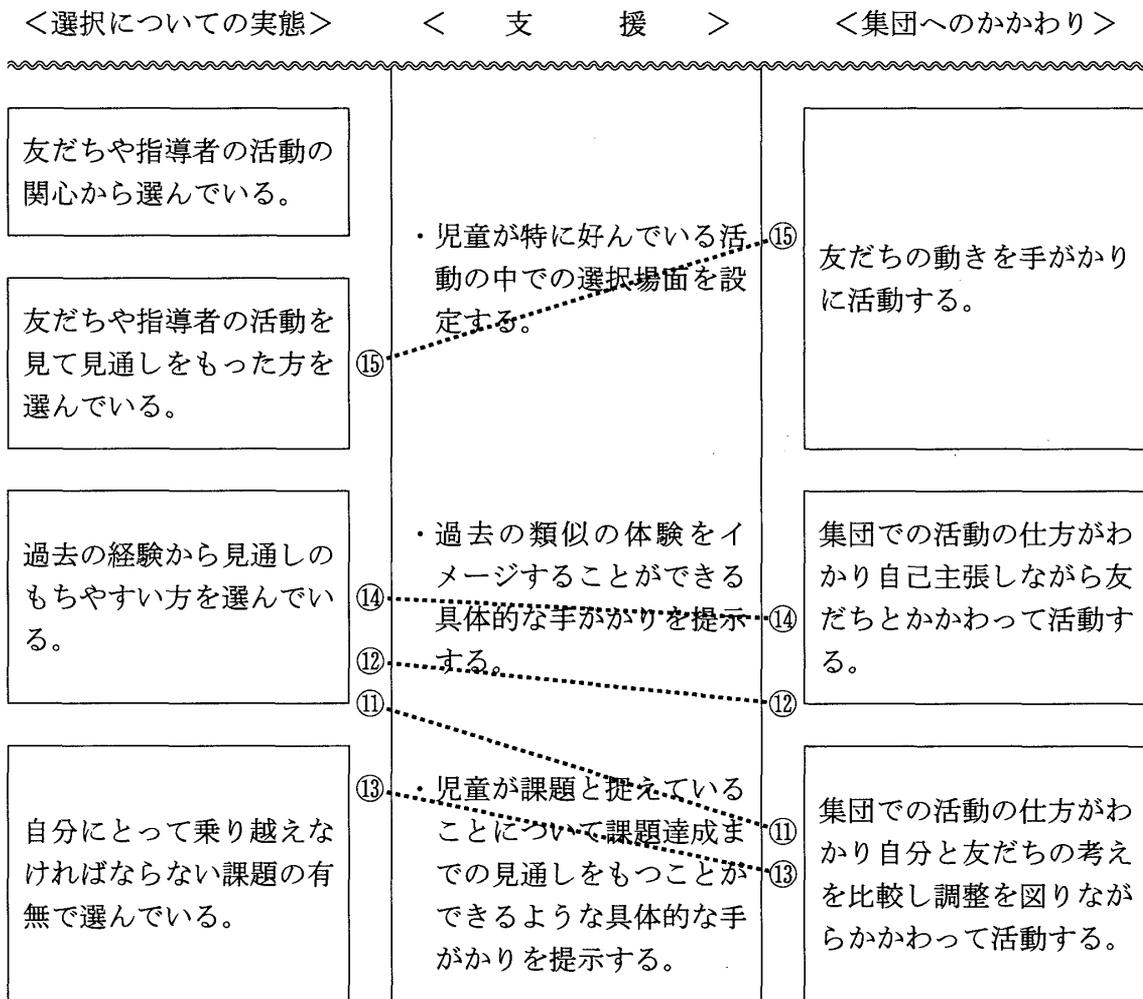
が大切であった。

② 活動時間を設定する支援

折り合いをつけることはできたけれども、本当に友だちの意見のよさに気づくことは難しかった。時間設定だけを支援とするのではなく、友だちの意見のよさに気づくことのできる手だてといっしょに設定していく必要があった。

3 児童の実態の捉えと活動の設定

児童の「集団へのかかわりについての実態」と「選択についての実態」から「支援の方法」について探るために、本学級が独自に作成した表（p144参照）から、本学級児童の実態を捉えると次のようになる。



これを簡単にまとめると次のようになる。

児童	選択についての実態	集団へのかかわり	必要な支援
⑮	友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。	友だちの動きを手がかりに活動する。	⇒ 児童が特に好んでいる活動の中での選択場面を設定する。

⑫ ⑭	過去の経験から見通し のもちやすい方を選ん でいる。	集団での活動の仕方が わかり自己主張しなが ら友だちとかかわって 活動する。	⇒	過去の類似の体験をイ メージすることができ る具体的な手がかりを 提示する。
⑪		集団での活動の仕方が わかり自分と友だちの 考えを比較し調整を図 りながらかかわって活 動する。	⇒	児童が課題と捉えてい ることについて課題達 成までの見通しをもつ ことができるような具 体的な手がかりを提示 する。
⑬	自分にとって乗り越え なければならない課題 の有無で選んでいる。			

この捉えにしたがうと、活動を設定する際の支援は次の3点になる。

- 児童が特に好んでいる活動を設定する。
- 過去の類似の体験をイメージすることができる活動を設定する。
- 課題達成までの見通しをもつことができる活動を設定する。

この3つの条件を満たす活動として、大単元「おまつり」の活動の中から、学級毎に開く食べ物の店で、「何を作りたいか話し合う活動」が適当であると考えた。

#### 4 本年度の取り組み～話し合い活動「なにをつくろうかな？」の実践～

##### (1) 単元について

「おまつり」の学習は、毎年秋に実施している。したがって、児童はこれまでの経験から「今年のおまつりでは、こんなものをつくってみたい。」と期待しイメージをもつことができている。しかし、期待が大きく、イメージが明確であるがために「これをつくりたい」という各児の思いが強く、学級で意見を一つにまとめる話し合いにおいては、自己主張することが多くなり、友だちの意見を受け入れることが難しいという一面もある。このような児童の実態に対し、自分の意見と友だちの意見を比較し、調整することができるような場面を意図的に取り入れていくことが必要であると考えた。自己主張するだけでなく、葛藤できる場面を経験することにより、友だちの意見を受けとめたり、自分の意見と比較して調整を図ってみようとしたりする力を養っていけるものと期待している。

本単元『なにをつくろうかな？』では、「おまつり」に向けて、学級で取り組む調理内容について話し合う。児童のこれまでの経験から、それぞれの調理内容に対する希望をぶつけ合い、話し合いを通じて意見を一つに集約していけるよう活動を展開していく。

##### (2) 話し合い活動を深める支援の方法と児童の変容

話し合いは、次頁の手順で進めていった。なお、昨年度の課題から次の点に留意した。

- ・ 児童の希望したものが具体物として必ず提示できるよう、予め希望を聞いて準備しておくこと
- ・ じっくりと友だちの意見のよさに気づいていけるよう、話し合いの時間設定をしないこと

	児童①	児童②	児童③	児童④	児童⑤
初めの希望	お好み焼き	スイートポテト	だんご	ホットケーキ	スイートポテト
話し合いⅠ	自 己 主 張				
↓					
具体物提Ⅰ①	実 際 に 食 べ る				
↓					
提示後の決定	だんご	だんご	だんご	ホットケーキ	だんご
話し合いⅡ	調 整				
↓					
日を改める	~~~~~				
↓					
具体物提示Ⅱ	実 際 に 作 っ て 食 べ る				
↓					
提示後の決定	だんご	だんご	だんご	ホットケーキ	ホットケーキ
話し合いⅢ	調 整				
↓					
最終決定	だんご	だんご	だんご	だんご	だんご

話し合いⅠでは、児童が希望した物の絵を提示し、各児が「なぜそれを選んだのか?」「その物のどこがいいのか」など、思いを言葉や指し示すことで表現するようにした。この段階では、各児の自己主張に終始し、深まりのある話し合いは見られなかった。

話し合いⅠの後、各児が希望したそれぞれの食べ物を実際に食べてみた。食べる際、自分が希望した食べ物を配ったり、食べながら希望した物のアピールをするようにした。また、食べた物の味についての感想を全員に求めた。思いを言葉で表現することが難しい児童に対しては、表情や食べっぷりから指導者その子の思いを代弁するようにした。

話し合いⅡでは、各児が希望した物を食べ終わった後に、話し合いをもった。この時点で、3人の児童が希望を変更していた。具体物を提示することや体験を通して学習することの意味を改めて感じた。言葉や動作だけでなく、実際に食べるという実体験をすることで、友だちの希望(意見)を受けとめ、自分の希望(意見)と比較して考え直して見ることができたものと思われる。この時希望を変更した児童には、「なぜ気持ちが変わったのか」言葉で説明するよう求めた。これにより、漠然としていた気持ちを言葉に結びつけ、表現力を高めていくとともに、より明確に自覚するようになっていきたと考えた。

この話し合いでは、だんごを希望する4人の児童が、ホットケーキを希望する1人の友だちに対し、だんごに変更できる方法はないものかどうか考え、意見を出し合うことができた。ホットケーキを希望した児童は、思いを言葉で表現することが難しかったため、指導者がこの児童の思いを代弁した。その中で、3色のだんご(醤油、きなこ、あんこ)のうち、その児童があんこを食べ残していることを4人の児童に示し、甘いものが嫌いであることを告げた。この事実から、「あんこはやめて、他のものを付けるようにしたらいい。」「あんこではなく、のりを付けたらいい。」などの案を考え、提案することができた。

話し合いⅢでは、日を改め、だんごとホットケーキを自分たちで実際に作って食べてか

ら話し合いをもった。食べた後の希望を確認すると、ホットケーキが2人に増えていた。3対2になった時点で、どのように話し合いを展開したらよいか児童に問いかけたが、解決策を見いだすことが難しいと感じられた。前回の話し合いで出した、「あんこの代わりに物をつける」という案以上のものを、児童だけの力で考えることは難しいようであった。そこで、ここからは、指導者の思いを伝えながら話し合いを進めた。

5人の食べているときの表情や食べっぷりから、全員がだんごもホットケーキも好きであることが伺えていた。そこで、話し合いⅡを生かすためにも、だんごにする方向で話し合いを進めていった。この日のだんごは、あんこではなく青のりを使用しており、あんこの嫌いだった児童も全部食べることができた。「ホットケーキもおいしいけれど、だんごもおいしかったよね。」「あんこは使わないから、だんごもおいしく食べられるよね。」などの声かけを行っていった。ホットケーキのよさを認めつつも、だんごのよさを強調することで、ホットケーキを希望していた2人の児童が「だんごでもいい」と気持ちを動かしたものである。ここまで進めてきたていねいな話し合いが、2人の納得に結びつき、だんごにするという全員の了解のもとに最終決定をすることができた。

#### 4 考察

話し合いを深めていく支援として、次の2点を強調した。

- ア) 友だちが希望したものを実際に食べてみることで、友だちの意見を体験的に理解し自分の意見と比較したり、調整を図ったりすることができるようにする。
- イ) 話し合いの途中で意見が変わった時には、その理由を説明するよう求めることで、漠然としていた気持ちを言葉に結びつけ、より明確な自覚ができるようにした。

ア) の支援については、実際に食べてみることで友だちの意見を体験的に捉えることができ、言葉や絵だけを提示するよりも直接児童の内面に働きかけることができた。友だちの意見を言葉や絵だけで聞いたり見たりするだけでは、本当の意味での理解に結びつくことはできず、児童が自らの考えを揺さぶられ、見つめ直してみるだけの強いインパクトは与えられなかった。友だちの意見としての具体物を目にしたり、触れたり、臭いをかいだり、食べたりする等、感覚として取り込むことにより初めて友だちの意見が理解でき、自分の希望したものと比較し、考え直してみるきっかけになった。また、食べながら味についての感想を求めることで、友だちの意見を自分の言葉で置き換えることができた。自分の意見と友だちの意見の比較がより深まったようだ。

イ) の支援については、気持ちの変化を言葉で表現することで、自分の意見に責任を持つことにつながっていたように思われる。漠然と自己の気持ちを捉えるのではなく、「自分はこうだ。」と明確に捉え直すことで、自分の気持ちを整理するとともに、これから先の展開をも考えることにつながっていった。また、友だちの発言を聞くことで、友だちの気持ちの変化を感じ取り、それを受けてこれからをどうするか、気持ちが動くきっかけは何かを考えることができた。

ア) の支援もイ) の支援も、単独では話し合いに深まりをもたせることはできなかったであろう。ア) の支援で、友だちの意見を真剣に受けとめ、自分の意見と友だちの意見とを比較・調整することができ、イ) の支援で、自己の意見に責任を持ち、友だちのことも視野に入れながらこれから先のことを見通した思考をすることができた。二つの支援が相まって、話し合いを深めていくことができた。今後は、更に話し合いが深まっていく支援の設定について探っていききたい。